

カントにおける直観と概念

森 本 義 裕

「これまで人は、我々のすべての認識は対象に従わなければならないと想定した。けれども、我々の認識がそれによって拡張されるような何ものかを、対象に関してア・プリオリに概念を通じて見つけるすべての試みは、この前提のもとでは失敗に終わった⁽¹⁾」。認識が対象に従うならば、いかなるア・プリオリで総合的な認識も得られないとカントが考えるに至ったのは、ヒュームによって独断のまどろみを破られたためであり、それ以後カントは、認識問題を根本的に覆すような態度（いわゆるカントのコペルニクス的転回）をもつて、ア・プリオリな総合的認識の存することを主張するに至った。その根本的に転回的な態度とは、直観ならびに概念がア・プリオリに我々の内に存しており、それらに対象が従うということである。我々の認識がア・ポステリオリに成立するものであるならば、その認識は普遍性や必然性を持ち得ない。あるいはまた、我々の内にア・プリオリな認識が存しているとしても、対象が経験的に与えられるならば、認識と対象の一致の根拠を見出すことができない。カントは、ア・プリオリな直観や概念によって対象そのものが初め

て成立するのであると説くことによって、普遍的で必然的なア・プリオリな認識を客観的に妥当的なものとした。しかもその際、ア・プリオリな総合的認識の客観的妥当性を力説し、対象構成の総合的性格ならびに経験構成一般の総合的性格を説いている。これは、経験そのものが、ア・プリオリに、そして総合的に成立しているということであり、我々のア・プリオリな認識が拡張的に経験に妥当することの意味している。ア・プリオリな認識といえども、分析的であるならば、我々の認識を拡張することはない。総合的である場合に我々の認識は拡張されるとカントは述べている。純粹数学や純粹幾何学、そして純粹自然科学の諸命題をア・プリオリで純粹な総合的命題であるとしたカントが、それらの命題を客観的に妥当的であると認めたことは周知のことである。けれども、そのように認めた根底には、経験の世界そのものがア・プリオリな総合的認識によって成立しているという思想があるのである。

ここに述べたようなカントの認識論の思想は、未だ根本的には理解されていないと思われる。直観と概念がいかにして対象を構成す

るのか。冒頭の引用でカントが「ア・プリオリに概念を通じて」と言う時、直観までもが結局は概念的に認識されることが含意されているのであるが、それでは対象はいかにして概念的に認識されるのであろうか。本稿の意図は、直観と概念に関するカントの思想を再考し、カントの認識論の基本的観点を理解することにある。

一

「……感性を介して我々には対象が与えられ、感性のみが我々に直観を提供する。しかし悟性によつては対象は思考され、悟性から概念が生ずる⁽²⁾」。カントにおいて感性と悟性は「人間的認識の二つの幹⁽³⁾」であり、感性は直観を、悟性は概念を与えるものである。けれども、この二つが全く別個に働くものでないことは誰もが認めるところであろう。「感性を介して我々に与えられる」対象は感覚印象にすぎないが、「悟性によって思考される」対象は必ずしも感覚印象であるとは限らない。感性と悟性の間には、構想力という媒介項が存する。構想力の総合によつて生の感覚印象はより高次な対象へと形成されてゆくことになり、この総合は統覚による統一によつて我々に概念を与えるものである。構想力は悟性にも属するものであるため、構想力の作用そのものが悟性の作用であるとも言い得るが、「悟性から概念が生ずる」という場合、すでに統覚による統一を経た悟性が考えられているのであり、構想力とは区別して考えられなければならない。このようにして、カントの場合、感性と悟性は一応区別して考えることができるが、事態的には区別し得ない面があると言ふことができよう。本稿では、統覚の統一を要する概念

の問題は後にゆずることにして、構想力を中心に直観の問題から考察することとしたい。本節では空間について、次節では時間について論ずる。

「我々がある対象によつて触発される限り、その対象の表象能力への作用の結果は、感覚である⁽⁴⁾」。ここで我々を触発する対象というのは、たとえばスミスが指摘するように、物自体のことであると考えられる⁽⁵⁾。表象能力 (Vorstellungsfähigkeit) すなわち心 (Gemüt) が触発された結果、感覚が生ずるという時の感覚は、単なる感覚印象であつて、何らの規定も受けていないものである。たとえば、赤の印象は単なる赤であり、形や大きさのある赤ではない。「経験的直観の無規定な対象は現象と呼ばれる⁽⁶⁾」。直観は対象の直接的表象であり、感覚印象に直接的に関わる⁽⁷⁾。感性は「印象の受容性⁽⁸⁾」であり、空間は「感性的直観一般の純粹形式⁽⁹⁾」であるから、空間は印象と直接的に関わり、ここに感覚を含んだ直観としての経験的直観が生ずる。この経験的直観に含まれる対象が「現象」と呼ばれるものであるが、未だ無規定であり、諸感覚が雑多に含まれているにすぎない。この状態をカントは「現象の多様⁽¹⁰⁾」と呼んでいる。現象において感覚は現象の質料であり、空間は現象の形式である。現象の形式は、感覚に対して「心の内にア・プリオリに用意されており、すべての感覚とは区別されて考察され得なければならない⁽¹¹⁾」。感覚と直観は起源から見て異なるものであり、感覚が経験的に生ずるのに対して直観はア・プリオリに生ずるのである。現象の形式としての空間は「それ自身純粹直観と呼ばれる⁽¹²⁾」が、これはベイトンの言うように感覚を方法的に捨象した表現であらう。純粹直観がそ

れ自体だけで表象されることはあり得ない。純粹直観は經驗的直観の根底にある直観であり、空間は、純粹直観であると同時に「感性の単なる形式」⁽¹⁴⁾であり、また、直観の形式であり、現象の形式でもある。

けれども、空間には二重の構造があるとカントは考えている。

「感性的直観一般の純粹形式」であるとか「現象の形式」であるとか、空間が「それ自身純粹直観と呼ばれる」というような表現の中には、すでにその二重構造が含意されている。「經驗的直観の無規定な対象」としての現象は、未だ秩序づけられていないが、現実の空間は整序されている。それについてカントは次のように述べている。「対象として表象される空間（幾何学において我々が実際に必要とするような）は、単なる直観の形式以上のものを含んでいる。

すなわち、感性の形式にしたがって与えられた多様を、一つの直観的表象において総括することを含んでいる。したがって、直観の形式（die Form der Anschauung）は単に多様を与え、形式的直観（die formale Anschauung）は表象の統一を与える」⁽¹⁵⁾。「直観の形式」としての空間は無規定な空間であり、感覚（多様）も無規定なままその中に含まれている。空間において「対象の形態（Gestalt）、大抵や、相互関係は規定されているか、あるいは規定可能（bestimmbar）である」⁽¹⁶⁾が、規定可能な状態（未だ規定されていない状態）があるのである。「直観の形式」の中では、たとえば赤という色は形も大きさもなく、また他の色ともいっしょになってくっついていて相互の関係を持たない。「形式的直観」は、そのような雑多な多様を秩序づけ統一する直観である。では「形式的直観」はいかにして生ず

るのであろうか。形や大きな赤にたとえばバラの形（形態）や大きさを与えるのは何であらうか。それは、「対象を、その現在（Gegenwart）なしでさえ直観において表象する能力」⁽¹⁷⁾すなわち構想力である。この構想力は自発性を持つものとして生産的構想力（以下、本稿では構想力と略す）と呼ばれている。⁽¹⁸⁾構想力は自発性である限り悟性にも属するが、「直観において表象する」すなわち直観を描出する（darstellen）ものである限り感性にも属する⁽¹⁹⁾とい得る。さらに、構想力は直観を描出する限りにおいて、単なる想像の能力すなわち再生産的構想力とは明確に区別されなければならぬ。再生産的構想力は自発性を持たず、単に連想の法則に従うものであり、心理学に属するものとされている。⁽²⁰⁾構想力は再生産的構想力と異なり、ある対象を思い出す能力ではなく、この世に初めてある対象を生み出す能力である。構想力はたとえば四足獣の形態を、「経験が私に提示する何らかの唯一の特殊な形態や、私が具体的に描与することのできるすべての可能的な形態に制限されることなく、普遍的に描くことができる」⁽²¹⁾。つまり、経験がこれまで我々に提示してきた四足獣の形態と、我々が思い出したり創作したりするあらゆる可能的な形態を越えてさらに描くことができるのである。

これは、構想力が初めて我々にある物体の形態を与えることを示している。我々自身の身体も同様である。構想力の作用は「盲目的」であるため、稀にしか気づかれないが、悟性の感性への「最初の適用」⁽²²⁾であり、残余の適用の根拠である。この「最初の適用」において、構想力は純粹空間を描出し、その空間を感覚に適用する。構想力は純粹空間を描出するのであり、その際様々な形態を描出し、色

に形や大きさを与え、また、色と色との間に空間をはさむことによって色を分離し、前後・左右・上下などの空間的相互関係の中に置くのである。色に限らず、その他の感覚も空間的諸関係の中に置かれると言えよう。構想力による感覚への純粹空間の適用はすなわち把握 (Apprehension) であり、把握の総合によって感覚は形象 (Bild) たりしめられるが、これと同時に構想力は「直観の形式」を規定している。「我々は、外的ならびに内的な感性的直観の形式をア・プリオリに空間と時間の表象において持っている。そして現象の多様の把握の総合はいつでもこれらの表象に適合しなければならない。なぜならこの総合自体がこれらの形式に従ってのみ生じ得るからである」。(23) 構想力の総合が「直観の形式」に従うならば、「直観の形式」はすでに三次元の空間でなければならない。「……空間の三次元は、同一の点から三本の線を互いに垂直に置くことなしには全く表象できない」(24) と言われている時、すでに三次元である「直観の形式」に構想力が三本の直線を引くことによって、「直観の形式」の三次元性を認識せしめることが意味されている。面は空間の限界であり、線は面の限界であり、点は線の限界であるから、空間なくしては面も線も点もない。構想力が純粹空間の描出過程において面や線や点を描出し、それによって「直観の形式」は規定され、規定された空間すなわち「形式的直観」へと成長するのである。この構想力の総合によって規定され統一された空間をカントは「感性論」においては「感性を孤立させる」(25) ために構想力の作用を捨象して説いている。したがって、「感性論」における空間は構想力の感性的側面 (結果としての産出された空間) だけを含んでおり、空間の成立過程は論

じられていない。「形式的直観」は、純粹空間である「直観の形式」としての空間が構想力の描出する純粹空間によって規定された結果生じた純粹空間であり、「直観の形式」と「形式的直観」はいずれも「現象の形式」であり「感性の形式」であり「感性的直観の形式」であり「純粹直観」であると言い得る。構想力による秩序づけは「直観の形式」に従って、またその中で行われるため、「形式的直観」に対して言われる事柄は「直観の形式」にもほぼ妥当することとなる。

このようにして、空間には二重の構造があるのであるが、このことから空間の特性が幾つか理解される。ここでは空間の無限性、唯一性、外延性、連続性について述べる。空間の無限性と唯一性とはカントにおいて同一の事態であり、一言で表わせば空間は唯一無限空間である。「空間は無限の与えられた大きさとして表象される」(26) が、この無限量としての空間は我々に直ちに知られるのではない。「直観の進行において無際限 (Grenzenlosigkeit) ということがなかったら、諸関係についてのいかなる概念も無限性の原理をとまなうことはないであろう」。(27) 直観の進行において際限がないために無限性が認識されるというのであるならば、そのためには際限がないということがそれ以前に認識されなければならない。この際限のないことはいくら空間が進行してもさらにその外に空間が存しているということであり、そのことは唯一の空間があることによって知られるであろう。空間が唯一でなければ限界を持つ空間が分立することである。したがって、唯一の空間が根源的表象として存することが必要である。「……第一に、人は唯一の空間を表象し得るにすぎ

ず、だから多くの空間について語る時には同一の唯一の空間の諸部分を理解しているにすぎない。これらの諸部分はまた、すべてを包括する唯一の空間の言わば構成要素（それからこの空間の合成が可能であるような）として、この唯一の空間に先行するのではなく、むしろこの唯一の空間の中で思考されるにすぎない。空間は本質的に唯一であり、空間における多様、したがってまた諸空間一般についての一般的概念も、ただこの唯一の空間の制限に基づいている⁽²⁸⁾。ここに、空間がまず第一に唯一のものであることが明言されている。カントはこの唯一性を空間のア・プリオリなものと純粋性の根拠としても用いているが、唯一性によってカントが主として言明したいことは、部分空間としての諸空間が唯一の空間の制限（Beschränkung）に基づいて成立しているということである。したがって空間の進行の無制限も唯一の空間が存することによって認識され、それによってさらに空間の無限性も認識される。この無限性として認識される空間は言うまでもなく先の唯一の空間であり、進行しゆく空間が無限量なのではない。いくら進行しても際限がなくその外に空間が存するということから、ア・プリオリな根源的表象として最初から存する唯一の空間が無限量として認識されるのである。さらに、空間の唯一性もまた、進行してゆく空間がなおその外に空間を残すということによって初めて認識されるのであって、唯一性ということが始めから認識されているわけではない。唯一の空間は当初単に直観されているだけである。このようにして、カントにおいて空間の唯一性と無限性とは別個に知られるものではなく、同一の事態において認識されるものと言い得る。残された問題は、部分空

間とは一体何かということである。唯一の根源的な包括的全体空間と、部分空間とは同一の空間でないことは当然である。両者は別種のものである。では、部分空間はいかにして生ずるのであろうか。その起源は構想力にあるとしか考えられない。唯一の空間は「直観の形式」としての純粹空間であり、部分空間は構想力の描出する純粹空間である。後者の空間は「外延量」であり、外延量とは「部分の表象が全体の表象を可能にする（したがって部分の表象が全体の表象に必然的に先行する）⁽³⁰⁾量である。この外延的空間は、全体が部分に先行する唯一の空間とは明らかに異なる。構想力は把握の総合において順次に部分空間を生み出しているのであり、これによって唯一の空間が規定され、「形式的直観」となる。構想力の総合は絶えずに続くものではなく、中断をとまなうものであり、たとえば、全く形を持たない赤という印象に空間を適用してバラの形態を赤に与えたとそこで中断する。その後バラの周辺の空間を生み出し、また中断して石の形態を描くというようにして進行する。物体の「拡がり」と形態は純粹直観に属する⁽³¹⁾」と言われる時の純粹直観は構想力の描出するものである。バラの形態を描く時にすでに把握の総合が行われているのであり、その間空間は連続的に産出されている。その後総合が中断し、また総合が再開されバラの周辺の空間が描出されるが、バラと周辺の空間は分離してはいない。バラの表象は面や線や点をとまなうが、これらは単なる限界であり周りの空間と分離されているわけではない。外延的空間は連続量であり、間隙を持たない。我々はそのことを構想力の総合を通じて認識し、それによってまた唯一の空間の連続性をも認識することになる。外延的⁽³²⁾

空間は常に唯一の空間の制限であるからである。ただ、外延的空間は集合 (Aggregat) であるのに対して、唯一の空間はそうではないということは注意しなければならないことである。唯一の空間は最初から連続量であり、構想力の描出するいかなる空間も全方向から限界づけられるが、外延的空間は集合として数々の時間点を通して形成されるのである。総合が中断されるといっても空間的に中断されるということであり、一つの外延的空間が形成される場合には時間的に中絶することのない一つの大きな総合が必要である。外延的空間は一つの総合を必要とするものとして集合と呼ばれ、多くの時間を持つ一つの時間において形成される。

二

構想力の総合は細かく考察すると様々な場合が考えられる。人類の歴史を考えることも総合であるし、庭の情景 (バラや石など) を捉えるのも総合である。また、一つのバラを描出する場合でも、一つ一つのバラを丹念に注視する場合とバラ全体を一挙に捉える場合とでは空間の描出のされ方が全く違うのである。総合は様々であり、また多重構造になっている場合も多い。そのような複雑な総合の有り方を探ることは時間の考察なくしては不可能である。カントは時間というものをどのように捉えていたのであろうか。本節では時間の考察を中心にして構想力の総合についても若干の立ち入った考察を試みたい。なお、構想力という語は以前として生産的構想力の意で用いることができる。生産的構想力という語は多義であり、自発性を持つ構想力は生産的構想力と総称されるからである。我々

は時間の考察をする場合にも生産的構想力に出会うことになる。

「時間の三様態は、持続性、継続 (Folge)、同時存在である」⁽³³⁾。持続性、継続、同時存在の三つの様態の内、根本にあるものは持続性である。同時存在はある時間点が必要とするが、時間点というものは継起的 (Sukzessiv) な時間すなわち継続して一つの系列を成す時間なくしては考えられない。さらに、この継起的な時間は持続的な時間なくしては考えられない。「人が時間自身に継起的な継続というものを付与しようとするならば、こうした継続がその中で可能となるようなもう一つ別の時間を考えなければならないだろう」⁽³⁴⁾。時間それ自身が継的に進行するならば、我々はその進行する時間がその中で進行する時間を考えなければならないが、その時間がまた進行するものであるならば、さらにもう一つ別の時間を考えなければならなくなり、そのようにして無限に多くの時間が必要とされる。持続する不動の時間なくしては我々は決して流れてゆく継的な時間さえ捉えることはできない。時間継起そのものが表象され得ないからである。そして継起的な時間なくしては時間点というものが生ずることはあり得ない。時間点すなわち瞬間というものは時間と時間との限界であり、持続する時間の中で継起する時間が生じた時に初めて生ずるからである。我々が同時存在を表象し得るのは、継起する時間の中で幾つかの物を表象し、それらの内の或る物を再生産して (思い出して) 別の或る物が存する時間点ないしは時間に重複させるといったような操作を要する。そのような操作あるいは手続きの在り方は様々であるが、いずれにせよ同時存在は時間継続の中で初めて表象されると言い得る。継起する時間なくしては時間

点というものが生じ得ず、また同一の時間点に二つの物が同時に表象されるということは時間的にはあり得ないからである。

このようにして、同時存在や継続という時間の様態は持続する時間を根本にしているということが明らかになった。持続的な時間は継起する時間とは異なる時間である。では持続的な時間とは一体何であろうか。また継起しつつ継続する時間はどのようにして生ずるのであろうか。我々はここでもまた「直観の形式」と「形式的直観」との区別を見出すことになる。時間も二重構造を持つのである。

「すべての現象は時間において存在する。基体(Substrat)としての(内的直観の持続的形式としての)この時間においてのみ、同時存在も継続も表象され得る」。「直観の形式」としての時間は「内的直観の持続的形式」であり、「留まっ⁽³⁶⁾ていて(Glücke)転変しない」。この不動の時間は基体であり、「継起存在ないしは同時存在がそこで時間の規定としてのみ表象され得る」ものである。この時間は「それ自体では……知覚され得ない」。⁽³⁷⁾時間が純粹形式であり、純粹直観だからである。これは空間の場合と同様である。持続的な時間はア・プリオリな根源的表象であり、唯一の全体である。「時間の無限性は、時間のあらゆる規定された大きさはその根底にある唯一の時間の制限によってのみ可能であるということ以外の何ものも意味していない」。⁽³⁹⁾空間の場合と同様、時間は根源的に唯一であり、その中で部分時間が継起的に産出されることになる。その部分時間は外延的な時間であり、部分から全体へと進行してゆく量としての時間であるが、やはり構想力の描出するものである。構想力は量のカテゴリの図式として時間を産出するが、それは「直観の形式」

としての持続的時間を規定することであり、それによって継起的な時間が生ずる。部分時間は産出された当初から「直観の形式」に両側から限界づけられている。それによって時間点というものが生ずるが、構想力の継起的な時間産出が進むにつれて時間点は多くなり、無限にそれが続く。これによって我々は時間の無限性を認識することになる。けれども、無限性の認識の根底には唯一性の認識があり、それは部分時間が常に同一の一つの時間の部分であることによって認識される。多くの時間があるならば無限性を認識することは不可能である。なぜなら、その場合時間の進行が途中で停止し、新たな時間の中で部分時間が産出されることになるからである。したがって、時間の唯一性は時間の無限性の根拠である。外延量としての時間は唯一でも無限でもないが、部分空間相互の間に間隙がなかったように部分時間相互の間にも限界としての瞬間があるだけで間隙がないことから連続量であることが認識される。これは集合であり、構想力の総合(時間の産出)の結果生じた連続性である。これに対して「直観の形式」としての唯一の時間は、部分時間が常にその制限であることから連続量であると認識されることになる。この場合にも、唯一性の認識が根拠となっているのである。構想力の総合は時間の場合においては連続的であり、時間の産出自体が中断されるということは一つの総合においてはあり得ない。瞬間は唯一の時間の制限としての部分時間と唯一の時間との接点であり、部分時間は連続的に産出されていると言えよう。カントは構想力によって規定された時間を「形式的直観」であるとし、また純粹直観であると⁽⁴¹⁾しているが、時間は「直観の形式」としての純粹時間が構想

力の描出する純粹時間によって規定されることによって「形式的直観」へと生成するのである。「直観の形式」も「形式的直観」もいずれも「純粹直観」であり、また「感性の形式」であり「感性的直観の形式」であり「現象の形式」である。

このような二重構造の上に繼起的時間は成立している。時間繼起は一次元的のみ行なわれ、我々はそれによって唯一の持続的時間の一次元性を認識することになる。構想力の総合は時間の場合にも「直観の形式」に従って行われるからである。構想力の総合は時間の場合においても把握の総合であり、部分時間が「直観の形式」を順次に把握してゆく（規定してゆく）ことになる。我々は構想力の総合の一次元性を通じて唯一の時間の一次元性を認識することになるのである。けれども、時間の一次元や空間の三次元は、時間と空間の唯一性、無限性、連続性、外延性とは別の次元の事柄であり、この両者は相互の認識の根拠とはなり得ない。それは、時間と空間の純粹性、形式性、直観性、そしてア・プリオリなものであることが、唯一性、無限性、連続性、外延性とは別個に説かれているのと同様である。カントは唯一性を純粹性や直観性、そしてア・プリオリであることの根拠として用いている場合もあるけれども、一方で純粹性や直観性、そしてア・プリオリなものであることを独断的に説くことも多い。カントの時間空間論はその歴史的成立事情を考慮するならば、唯一性を根拠とするだけでは尽せないものであり、唯一性は時間と空間の無限性や連続性の認識の根拠とはなり得ても、その他のものの認識の根拠とはなり得ないと言わなければならない。

持続的な時間は、一方で継続や同時存在の基体と言われているが、他方では持続性は時間の三様態の一つとされている。このような事態は時間が一つしかないとしたら考えられないことである。一つの時間が、継続や同時存在の基体とされながら同時にそれらと同列に置かれるということはあるまい。けれども、持続的な時間と繼起的な時間を区別するならば、持続的な時間は、時間一般という観点から見れば時間の様態の一つであり、時間の構造という観点から見れば繼起的な時間の基体として捉えることができる。コーヘンのように持続性を時間の内容としての実体の持続性として捉え、時間それ自体の持続性あるいは基体性を認めない意見もあるが、時間それ自体が持続していなければ分離した多くの時間が存することになり時間の統一がとれないであろう。持続的で不動の時間は「直観の形式」として根源的に存しており、その中でそれを規定する繼起的な時間が産出され、「直観の形式」は「形式的直観」へと生成するのである。

以上のような時間の考察から、我々は構想力の総合を時間と空間の両面から同時に捉えることができる。「直観の形式」である時間と空間は我々の表象能力に感覚が生じた当初から存している。感覚はそれらの時間と空間とは関わりなく生じているから直観されても何らの時間的空間的規定も持たない。色、硬さ、音、温かさ、痛み、匂いなどが一緒になってくっついている。カントはこの状態を「絶対的統一体」⁽⁴³⁾と呼び、その直観の仕方を「共観」⁽⁴⁴⁾(Synopsis)と呼んでいる。この状態では時間と空間は不動であり、感覚をその中に含んでいるが感覚と関わりなく存している。もしもこの状態

が続くならば、感覚は不動の時間と空間の中をそれらに関わりなくうごめくことになる。忘我の状態に近いであらう。けれども大抵は構想力がすぐに働くのである。構想力は時間と空間を同時に産出して感覚を把握し、把握を総合することによって形象を作る。色や硬さなどは形態を与えられ物体となり、音も秩序づけられて旋律を奏でる。把握の総合は同時に「直観の形式」を規定することでもあり、諸感覚を「直観の形式」の中に配置することになる。部分空間は一緒になっている諸感覚をひきちぎって入りこみ、奥行きその他の空間的諸関係の中に入れる。色や匂いや音などはくつついているがひきちぎられ唯一の全体空間のどこかに押しやられる。色と色もひきはなされまた形態を与えられて全体空間のどこかの部分に配置される。もっとも、ひきはなされない諸感覚もある。部分時間は諸感覚を継続の中に入れて静止や運動といった状態を作り出す。生成や消滅、変化なども時間継続の中でのみ表象可能である。構想力の総合は我々が忘我的な状態にならない限り時間的には中断されることとがない。部分時間と部分時間の間は瞬間であって区切りではあるけれども時間の流れが中断するのではない。空間や時間の描出は大きくも小さくもあり得、任意であるが、その大きさの尺度も任意であって、物理的な測定値とは異なる主観的なものである。

把握の総合は再生産の総合をともなっている。把握が直観の把握と感覚の把握に分けられるように、再生産も純粹なものを経験的なものに分けられる。時間と空間の再生産は純粹であり構想力の作用であって、この作用によって時間と空間の純粹形象が作られる。これに対して感覚印象の再生産は再生産的構想力によって連想の法則

に従って行われるが漠然としたものである。再生産された諸印象と生の印象が、純粹形象の中に入ることによって形象が生ずる。把握と再生産の二重の総合は、形象の他に経験をも作り出す。幾つかの総合が総合されることによって現在ここにはないものを含む複合的な表象が作り出され統一ある経験が生ずることになるのである。その際、過去になされた総合は漠然とした再生産的表象となってしまうことが多く、その時の時間と空間は純粹表象とは言えないものである。つまり単なる記憶となってしまうのである。けれども、そのような記憶を入れて経験を構成する総合は、形象を作る時よりも広大なスケールを持たされた唯一の時間と空間の中で把握の純粹総合を行い、記憶に対して純粹な部分時間ならびに部分空間を適用していると考えられる。

三

構想力の総合は、さらに概念における再認の総合をともなっている。直観における把握の総合は構想における再生産の総合をともない、再生産の総合は概念における再認の総合をともなう。これがいわゆる三重の総合であり、三者は一体となっており、一つでも欠けると経験は成立しない。では概念における再認の総合とはどのようなものであろうか。

直観や構想が経験的なものと純粹なものに分けられ、把握や再生産が経験的なものと純粹なものに分けられたように、概念も経験的概念と純粹概念に分けられ、再認も経験的なものと純粹なものに分けられる。経験的概念は経験から抽象された概念であり、犬、馬、

赤などの概念である。純粹概念は、純粹感性的概念、純粹悟性概念（カテゴリー）、純粹理性概念（理念）の三つに分けられる。純粹感性的概念は「感性的の純粹形象」に⁽⁴⁵⁾その起源を持つていと言われているが、この純粹形象は單に数学的形象を意味するだけではない。幾何学的図形や数の形象は数学的形象であるが、これ以外に、明確な名辭を与えられない形態があり、また、その概念がある。円や三角形や一、二、三……といった名辭を与えられている数学的形象の他に、四足獸や人間などの一般の形態があり、その概念がある。「ある種の普遍概念」⁽⁴⁶⁾と呼ばれているものがそれであり、この概念は数学的概念と異なり特殊な名辭を付け難い複雑な形態の概念である。純粹感性的概念は、形態に関しては、幾何学的形態の普遍概念の他に何らかの明確に名付けられていない形態の普遍概念を含んでいる⁽⁴⁷⁾。また、形態となり得ない形象の概念としては數概念と時間概念と空間概念、そして時間と空間に関するあらゆる概念を含んでいるが、これらは概念である以上やはり普遍概念である（數概念は時間に関する概念である）。時間と空間は直観としては個別的表象であるが概念としては普遍的表象であると言わなければならない。純粹感性的概念は經驗的概念の根底に潜んでいることもあり、たとえば犬や人間などは經驗的な要素を多く含むために經驗的概念と呼ばれるが、形態に関しては純粹感性的概念である。感性的の經驗的表象の根底には純粹形象が存しており、それには純粹概念が対応する。赤や寒さといった概念は純然たる經驗的概念であるが、これらは極めて主観的な概念であり人によって意味内容が大きく異なるものである。經驗的概念と純粹感性的概念はいずれも經驗から獲得された

概念であり直観が先行するが、純粹悟性概念（カテゴリー）はその起源を悟性それ自体の内に持っている。純粹理性概念（理念）はカテゴリーから推論を通じて生ずる概念であるが、これについては本稿では触れる必要はないであろう。概念における再認の総合とは前に把握された表象と現在再生産されている表象とが同一のものであることが概念において再確認されることである。たとえば一本の線の表象は、線の諸部分が順次に描出されることによって生ずるが、前に描出された部分が連続的に再生産され続けなければ一本の線にはならない。そして再生産された部分が以前に引かれたものと同じのものであるという意識がなければ次々と新しい部分が生産されていくことになりいかなる全体的表象も生じないことになる。以前に引かれた部分が消えてゆくことになるからである。さらに、再生産された表象が以前の表象と同一のものであるという意識が成立するためには概念が必要である。線の諸部分に付与せられる意識はばらばらに分散しており一つの意識において統一されていない。線という概念は分散された意識を一つの意識において統一するが、これによって線の諸部分はすべて私の表象となり線の表象において統一される。再生産の表象は私の同一の作用によって再生産されたものであるため、以前の表象と同一のものであると意識されることになるのである。統覚の分析的統一が総合的統一を前提とするように⁽⁴⁸⁾線の諸部分も一度総合的に統一された後分析的に捉えられ同一性を確認されるのである。

概念は通常総合の規則を意味し、概念に従って総合が行われるが、ある概念が未だ獲得されていない場合は総合の後に概念が生ず

る。それらの概念は当初「あるもの一般Ⅱx」⁽⁴⁹⁾として捉えられるにすぎないが、やがて名辞を与えられるものもある。一度概念が獲得されると総合の規則として働くが、我々は最初から概念を明確に意識しているのではない。総合作用自体が魂の盲目的な作用であり意識されることさえ稀であると言われている⁽⁵⁰⁾。総合の当初意識は非常に微弱であり何かの概念をとまなっていない。絶対的統一体である感覚印象に直面した時、構想力に総合の規則を手渡すのは概念の図式である。概念は直観の構成から得られたものであるから作図の手順あるいは順序を意味するが、図式は「モノグラム」⁽⁵¹⁾（略図）であって思考の内にのみ存し、感覚印象に向けられる。この図式は概念に変わって総合の規則を意味し構想力を指導するのである。ここでは経験的概念と純粹感性的概念について考えているのであるが、形象は、純粹感性的概念の図式を介して初めて可能となり、また概念と連結される⁽⁵²⁾。なぜなら形象は概念の普遍性を表現しないからである。我々が概念を持つのは「総合の意識」⁽⁵³⁾を経た統覚の統一においてであり、また概念によって統覚が統一されるのであるが、概念は意識内容であって純然たる普遍的表象である。図式は、形象ではないが形象的なものであり、概念と形象を媒介する働きをするのである。形象が純粹感性的概念の図式を介して可能となるというのは、経験的概念もその形態に関しては純粹感性的概念であるからである。純粹感性的概念の図式はア・プリオリな純粹構想力の産物であるが、この概念と図式はいずれも後天的に経験を經て生じたものである⁽⁵⁴⁾。これに対してカテゴリーはア・プリオリな起源を持っている。構想力の総合がカテゴリーに従って行われることは周知のこと

であるが、カテゴリーも図式化される。カテゴリーの図式は超越論的時間規定である。量のカテゴリーの図式は時間自身の産出であり、その他のカテゴリーの図式も多くの場合重複してこの産出された時間の中に同時に産出されていると考えられる。

時間と空間の概念は構想力の総合を通じて獲得されるものである。時間と空間は唯一の根源的表象であるが、この唯一性は総合を経なければ概念的には認識されない。無限性、連続性、外延性も同様である。また、前後、左右、上下、継起、同時存在等も同様に総合を通じて概念化される。また、時間の一次元や継起は、純粹空間の描出において一本の直線が引かれる時我々が内的感覚の働きに注意することによって認識されると言われている⁽⁵⁵⁾。カントにおいて認識は直観と概念の両者を必要とするが、時間と空間も概念なくしては認識されないのである。本稿ではカテゴリーについては詳論しなかったが、これは別の機会に譲りたいと思う。時間と空間の概念そして直観についても大綱を示し得たにすぎないが、コペルニクスの転回と言われるカントの認識論の基本的な観点は示し得たと思われる。

注

※カント『純粹理性批判』からの引用は第一版をA、第二版をBとして頁数をアラビア数字で記す。

(1) BXVI. (2) A19, B33.

(3) A15, B29. (4) A19f., B34.

(5) N. K. Smith, A Commentary to Kant's "Critique of

Pure Reason", 1923, p. 82.

- (6) A20, B34. (7) A50, B74.
 (8) A50, B74. (9) A20, B34.
 (10) A20, B34. (11) A20, B34.
 (12) A20, B34f.
 (13) H. J. Paton, Kant's Metaphysic of Experience, 1936, vol. I, p. 103f. $\text{カントの『純粋理性批判』の「経験の形而上学」について}$
 (14) A21, B35. (15) B160.
 (16) A22, B37. (17) B151.
 (18) B152. (19) B151.
 (20) B152. (21) A141, B180.
 (22) B152. (23) B160.
 (24) B154. (25) A22, B36.
 (26) B39. (27) A25.
 (28) A25, B39. (29) A24f., B39.
 (30) A162, B203. (31) A21, B35.
 (32) A169f., B211f. (33) A177, B219.
 (34) A183, B226. (35) B224.
 (36) B225. (37) B225.
 (38) B225. (39) A32, B47f.
 (40) A145, B184. (41) B207.
 (42) H. Cohen, Kommentar zu Immanuel Kants Kritik der reinen Vernunft, 1917, S. 88f.
- (43) A99. (44) A97.
 (45) A320, B377. (46) A141, B180.
 (47) $\text{『カントの『純粋理性批判』の「経験の形而上学」について} \text{ H. J. Paton, Kant's Metaphysic of Experience, 1936, vol. II, p.35, note 6.}$
 (48) B133f. (49) A104.
 (50) A78, B103. (51) A142, B181.
 (52) A141f., B181 (53) B134.
 (54) A141f., B181. (55) B154f.
 (56) $\text{『カントの『純粋理性批判』の「経験の形而上学」について} \text{ H. J. Paton, Kant's Metaphysic of Experience, 1936, vol. II, p.35, note 6.}$